＜特別論考＞

「おきなわ自由大学」に寄せて

○♪♪海の青さに空の青…、「芭蕉布」の歌ではないが、豊かな自然、ゆったりとした時の流れ、人情味溢れる生活文化、等々、「おきなわ」のプラスイメージを表す言葉は数限りなくある。しかし、一方で、離島苦、就業難、基地被害、自然破壊、経済格差、等々、マイナス面を形容する言葉も、それに劣らず豊富にある。以前どこかにも書いたが、「おきなわ」は複雑である。「おきなわ」は、異民族支配と本土復帰、戦争と平和、基地と反戦、開発と環境問題、繁栄と貧困、等々、いわば、そこにおけるジレンマ、パラドックスという構造の中で、その特異な歴史を刻んできた。そしてまた、その中で、「おきなわ」は、内に働く分裂・相克のベクトルと外に働く統合・団結のベクトルを併せ持ち、双方が、ある時はぶつかり、またある時は和合するという、そうした構図を繰り返し綾なしてきた。さらにまた、それは、そこから常に我が国全体が見えてくるという、真に奇妙な運命を背負わされるものでもあった?!その意味では、「おきなわ」は、全ての前線基地なのかもしれない。いずれにしても、そのベクトルの「合力」をいかに内在化させ、それを最大限に発揮できるか、それがこれからの「おきなわ」の発展の鍵であり、そこに脆さや弱点があれば、これまで通りに、歴史や時の権力に翻弄され続けるであろう。

○それでは、そうした文脈の中で、一体「おきなわの自由」は、どのように考えればよいのであろうか？その背景としては、例えば本土化、自主独立、辺境と隷属、いくつかの選択肢があろう。ノスタルジックには、万国津梁、つまり様々な地域・世界への架け橋、大海のクロスロード（十字路）としての自覚と責任の中で、自らのアイデンティティを確立することなのであろう。未来的には、次世代のスタンスの中に、政治や経済といった枠組みを自己確立化させ、そこでの自らのアイデンティティを発信し続けることであろう。それはまさに、本土や他国の人々の憧れや日常生活からの逃避を、単に「観光」や「癒し」によって受け入れるということではなく、お互いの「生きる」ということへの共感であり、共に生きる術を共同構築することであろう。したがって、それは、単なる経済効果を目論むものではなく、そこにおける精神の自由を獲得（回復？）することでもある。ここを見逃すと、これまで通りの、分裂・股裂き状態が続くことになる。「おきなわの自由」とは、すべての権力、他国・他県民から距離を置くことではなく、長い間の（苦悶の?!）歴史の経験者として、「そこに生きる」ということの意味を、自らの想いと力で、内外に向かって形に現すことにあって欲しい。

○ところで、「自由」とは、一般には、「何ものからも束縛されていないこと」であるが、社会的文脈からすれば、例えば、特定の政治、宗教、営利等から解放されていることである。しかし、すべての束縛から解放されるということは、現実的にはあり得ない。しかも、仕事、家庭、地域、これらと無関係な自由もあり得ない。したがって、自由とは、様々な状況・人間関係にありながらも、そこから目を背けずに、他者との有意な関係を創り出さそうとする、個々人の自律的な精神作用ということができる。また、だからこそ、自己の意思決定と責任の取り方が重要だということにもなる。したがって、これからは、そうした構図の中で、いかに自らのアイデンティティを確立することができるか。それは、個々人として、そしてまた社会全体として、問われるべき課題ではないだろうか。そこに、その社会における文化の質が問われるのでもある。例えば、沖縄の「チャンプルー文化」とは、まさにそうした生活の様相を、したたかではあるが、その基軸を内外に多少なりともアピールすることができるものではないだろうか。ただし、それだけでは、ある種の切なさを感じるが…。

○さて、そうした「自由」の発現の場として、「大学」がある、否「あった」というべきか?!もちろん、それは「学問の自由」であり、それを実現するための「大学の自治」である。その使命は、「真理」の探求である。ただし、現在、「何における真理の探求か？」がおろそかになってはいないか！「真理」とは、単なる正義や事実ではなく、そこにある「生きるということの意味」である。したがって、その「リアリティ」の中で、それを「解釈」し、その意味を自ら「共感」できるということが、「学問の自由」なのである。そしてそれは、若い人、次世代のためだけのものではない。そこに、本来の意味での「生涯学習」の要請があるのである。ならば、これまでの正規の大学とは違った（精神としては、それへの反発ないしは真の学問への憧れ?!）、個々人自らが自由な発想と関わりの中で、上に挙げたような学びの場を創出することが必要となる。そこには、固定された建物、敷地、あるいは法律等は無用である。だからこそ、「自由大学」なのである。ちなみに、歴史的には、北欧、特にデンマーク発祥の「市民大学」（グルントウィ創設）があり（ドイツでは Volks Hochshule と呼ばれる）、我が国では大正末期から昭和初期にかけて、長野県を中心に起こった「自由大学」運動がある（土田杏村の「信濃自由大学」はつとに有名）、近年では、福岡県宗像市の「むなかた自由大学」等、が挙げられる。しかし、本「おきなわ自由大学」は、それらに思想上の影響は受けているが、決して模倣や継承を意図するものではない。とはいえ、そこに流れる学びの思想は、国を超え、時代を超えても変わらないはずである。　　＜堂本　彰夫＞